

や、当初意図しなかった帰結が伴ったのだと考えざるを得ないことがしばしばあるのである。

本稿では、援助交際の動機や目的に用いられる「お金」という言葉を、援助交際の相手を納得させ、調査者である筆者を納得させ、自分自身をも納得させるというカテゴリー化された言葉であるにとらえたい。援助交際をしている女性はしばしば「なぜ援助交際をしているのか」と相手の男性に尋ねられると言う。そのとき「お金」と答えておけば自分の内面に踏み込まれずすむと話してくれた。「お金」という言葉は、当の行為と期待にギャップが生じたときに、こう言えば他人は納得し安心するだろうという動機の語彙¹⁰⁾に他ならない。

もちろん援助交際している女性たちにとって「お金」は必要である。ただし援助交際で得ることのできる「お金」は筆者から見れば、援助交際という行為を自己で正当化し、援助交際のような反社会的な行為をしている自分を「わりきる」ための動機の語彙として彼女らに作用している。インタビュー当時18才の大学生であったマキは次のように話してくれた。

<データ4> (): 筆者補足

筆者：援助(交際)と恋愛関係はどう違うの？

マキ：お金をもらっているということは、お金を払う側ももらう側もそこには愛がないから、お金で精算している。お金がなければ終わり。

(1997.7.16 収録)

匿名性の獲得と「お金」という自分の行為を割り切らせる口実を通して既存の社会関係から離脱することが可能になること(このことを「脱社会性」と呼ぶ)で、彼女たちは自己の実存的な意義を援助交際というコミュニケーションの中で獲得するのである。このことを次に見てみよう。

3-3 匿名性によるロールプレイ

援助交際というコミュニケーションは、お互い

のプライバシーには干渉しないことを前提としている。そのために私たちが日常行っている経済的行為として割り切るための「買う-売る」という関係が必要なのである。このようにして匿名性を獲得することで、これまでの社会関係から離脱することが可能となる。お互いを匿名性があるがゆえに、いわばお互いが何者であるかが社会的に特定できず社会的関係が継続できないがゆえに、誰にもうち明けたことのない話をしたり、性的な自分をさらけ出したり、あるいは日常の社会関係にある自分とは異なる自分を演出できたりするのである。

アキは援助交際している自分の状態を楽しいと話す。それは日常生活での彼氏とつきあっている女性としての自分とは異なる自分を、援助交際では演じることができるからだと言う。アキの場合、援助交際という、彼女にとっての擬似恋愛のツールを通して、「かわいい」自分を意識的に演出し、楽しむことができるのである。

<データ5> (): 筆者補足

筆者：援助(交際)している時って、楽しい？

アキ：楽しいですよ。なんか恋愛ごっこしたかったんですよ。今まで、ほんま。でも、それ思いますよ。恋愛ごっこっばいやつ。すごいかわいいなと思うようなことを。今までしたかったんやけど、今の彼氏はちょっと大人すぎてあんましできひんところもあって、今までちっちゃい頃から知っているような人やから、作るにも作られへんし、ほんですごい、本音っていうか、自分の嫌な部分も全部見られているっていうか、だから、その部分で、なに、妥協できひんっていうか、そう、だから、もう一人の自分じゃないけど、けっこう作って楽しんでいる部分もあるんちゃうかなあって思うんですよ。

(1998.2.19 収録)

また援助交際というコミュニケーションを通して、男性側も女性の性、俗に言う「身体目当て」

10) 「動機の語彙」とは、アメリカの社会学者C. W. ミルズの言葉である。ガース&ミルズ著『性格と社会構造』参照。